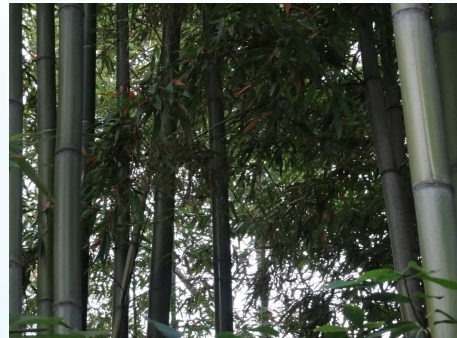


清風動脩竹

せいふうしゅうちく うご
清風脩竹を動かす



はや、6月も半ばとなりました。

梅雨に入り、ぐずついた天気が続いております。

日中は一足早い真夏の気候、日が沈むと思わぬ涼しさ...^{しの}凌ぎにくい毎日ですが、見渡す木々の緑はその色を深め、眼にするだけで涼しさを感じるようなこの頃でございます。さて、今回の禅語です。

せいふう しゅうちく うご
清風 脩竹を動かす

^{さわ}爽やかな清風が吹き抜け、ほっそりとした青竹の若葉を優しく動かします...

サラサラサラ... サラサラサラ.....

初夏の汗ばむ肌^{まと}に、じっとりと纏わり付く、湿った空気を、そっと振り払ってくれるように、竹の青葉は控えめに、乾いた音をたてて静かに揺れ動きます。

サラサラサラ... サラサラサラ.....

「脩竹^{しゅうちく}」というのは、ほっそりとして、ひよろひよろ背の高い竹です。ですから、少しの風で、ざわざわとその藪を揺らし、涼しげな風を送ってくれるのです。

いかにも初夏にふさわしく、清々しい情景です。

さて、この禅語を目にすると、やはり想い起こされる名句があります。

あいおく もん あ しゅうちく
相送當門有脩竹 相送って門に当たれば脩竹あり

爲君葉葉起清風 君が爲に葉葉清風を起こす

(『虚堂録』)

これは、日本のわたしたちにも馴染みが深い、虚堂智愚禅師の『行、鞏、珙の三禅徳国清に之く』と題する詩の一節です。

「行、鞏、珙」というのは、虚堂禅師と、修行の上での親戚に当たる石帆惟行、石林行鞏、横川如珙という三人の禅僧（三禅徳）です。

この三人が、「国清」つまり天台山の「国清寺」へと行脚の旅に出ようというとき、道筋が近かったのでしょうか、途中、虚堂禅師がおられた靈隠寺の驚峰庵へと立ち寄りませう。

しばし旧交を温め、こころ楽しい一時を過ごしたのち、いよいよ別れの時がやってきます...

宏大な中国の大地... 昔のことですから、次はいつ会うことができるのか、誰にもわかりませう。別れがたい思いで、門のところまで見送りにでると、傍らの脩竹の林が、サラサラサラ...

別れを惜しむかのように、そよ風にその葉を揺らし、清らかな風を送ってくれませう...

「国清寺」というのは、有名な「三隠」... 豊干禅師と寒山、拾得の由緒の場所... 俗塵を去り、人里を離れ、深い深い天台の山奥に、ひっそりと風狂の一生を送った伝説の三人...

修行をともし、気心知れた三人の間は、国清寺の「豊干、寒山、拾得」のように、清らかな心の友です...

この清らかな友との別れに、言葉などいりませう... ただ、黙ってお互いの眼を見つめる...

そこに、初夏の蒸し暑さを払う一陣の風... サラサラサラ...

言葉などなくとも、傍らの脩竹が、私の心を伝えてくれる。竹の葉の一枚一枚までもが、からだを揺すぶって、涼しげな風を饑別に、別れを告げていてくれる...

蒸し暑い季節だからこそ、心からの、本当の清々しさをわが友としたいものです。

